別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名：鈴木恵美

鈴木恵美氏の博士学位請求論文「エジプトにおける行政・立法関係―体制変化と世襲議員の変容―」は、王政期から現在に至るまでエジプトの国会の議席を占有し続けている「議会家族」と呼ばれる名望家層の分析を通じて、政権基盤に安定性を与えるパトロン・クライアント関係の構造を明らかにした労作である。本論文を特徴づけるのは、1866 年から 2000 年までの 32 回の議会、合計 7633 議席を選挙区別に詳細に分析した全国会議員データベースの作成に見られるところの、膨大な情報の処理と分析に支えられた実証性の高さである。以下に論文の各章の概要を述べる。

序章では、先行研究・依拠した資料・分析方法が解説され、議会家族の具体的な事例が示された。

第１章では、エジプトの議会制度史が概観され、政治エリートとしての国会議員の位置づけの変容がとくに 1952 年革命前後の変化を中心にして考察された。

第２章では、全国会議員データベースをもとに合計 82 の議会家族が抽出され、各議会に占めるその割合が革命後著しく低下し、サダト政権下で再び増加したことが明らかにされた。またその地域別の特徴や議員の経歴と社会的属性についても考察があった。

第３章では、革命前の王政期の議会家族が当時の政党政治との関係において分析された。とくにワフド党と非ワフド党諸派の政権をめぐる争いが激しさを増した 1930 年代以後、議会家族が全国規模で長期間議席を占有するようになった過程が明らかにされた。また議会家族の各政党へ帰属意識についても考察があった。

第４章では、革命後の議会家族の変化が考察された。ナセルの政治改革は大地主の議会家族の議席確保を困難にしたが、一方中規模地主の議会家族は議席を維持したこと、そしてサダト政権期には中部・上エジプトの議会家族が左派勢力の粛正に協力することで政権基盤に安定性を与え、ナセル期に議席を減らした一部の議会家族が復権したことが具体的に明らかにされた。

第５章では、現ムバーラク政権と議会家族の相互依存関係が考察された。支配機構である与党・国民民主党に、大半の議会家族が所属する過程が明らかにされ、また農業に利害を持つ議会家族が、農業改革政策の施行において要職に登用されるなど、人民議会の運営において主導的な役割を果たしてきたことが示された。

終章では、国会選挙分析によって 1990 年代以降議会家族の当選率が低下していることが明らかにされ、現在、政権と議会家族の関係に変化が起きつつある可能性があり、これが今後のエジプト政治の民主化問題に大きな意味を持つであろうことが指摘された。

また補論では、現ムバーラク政権と議会家族との関係を考察する資料として、国民民主党の党綱領を分析し、党の中央･地方組織の構造と指揮命令系統が分析された。

審査委員会では、論文の題目の妥当性、用語表記や文献目録の形式、先行研究への言及などについて問題点が指摘されたほか、現在の農業改革政策の性格、遊牧民部族の定住化との関係、チェルケス系などの名望家家系、都市化の影響とムスリム同胞団との対抗関係などの問題について質疑が行なわれた。本論文全体の評価については、情報の非公開性などの困難な資料状況のなかで網羅的といってよいほどのきわめて詳細なデータベースを作成した努力、また従来エジプト政治研究の中心テーマであった政治エリート研究において議会エリートという研究対象の空白を埋める研究である点、なかでも代表的な先行研究である L.バインダーの研究を超える水準の内容であり、中東政治研究において重要な貢献をなす成果である、などの指摘があった。以上の評価が示すように、本論文が学術業績として極めて有意義な成果であることにおいて、審査委員全員の意見が一致した。

したがって、本審査委員会では同論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。